

生駒市内遺跡発掘調査概要報告書

2001年度

2002年3月

生駒市教育委員会

生駒市内遺跡発掘調査概要報告書

2001年度

2002年3月

生駒市教育委員会

はしがき

生駒市内は、国指定史跡の行基墓、国宝の長弓寺本堂をはじめとして多くの文化財があります。

生駒市教育委員会では、このような先人が残した貴重な文化財の保護に努め、地下に眠る遺跡についても発掘調査を継続的に実施してまいりました。本報告書は、平成13年度に発掘調査を実施したもののうち、個人住宅の建設に先立つ発掘調査についてその結果をまとめたものです。本書がわずかでも各分野の研究の一助となり、地域の歴史を掘り起こすこととなれば望外の喜びです。

本年度の調査におきましては、建築主の皆様ならびに調査地周辺の皆様、関係諸機関に多くのご協力を賜りました。厚く感謝申し上げます。

また、今後とも本市の文化財保護に対する御理解と御支援のほどを、よろしくお願い申し上げます。

平成14年3月

生駒市教育委員会
教育長 尾山敬作

例　　言

1. 本書は、国庫補助50%・県費補助25%・市負担25%（総額1,000,000円）で実施した、個人住宅の建築工事にともなう発掘調査の概要報告書である。
2. 現地調査は、調査原因にかかる個人の依頼を受けて、奈良県教育委員会および奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、生駒市教育委員会生涯学習振興課 矢田直樹が担当した。
3. 現地の土色および土器の色調は、「新版 標準土色帖 1999年版」を参考にしている。
4. 遺構写真・遺物写真は矢田が撮影した。
5. 各遺跡の調査記録、出土遺物等は、生駒市教育委員会において保管している。
6. 調査および本書の作成にあたり、下記の方々からご指導・ご協力いただいた。記して謝意を申し上げる次第である。(敬称略・順不同)
松田真一　近江俊秀　清水康二　市川秀之　山田隆一
株式会社アート
溝田　旭　　田中宏和　藤井宣彦
7. 現地調査および本書作成にかかる整理作業には、下記の方々の協力を得た。
池田計彦　井上大介　木下一誠　久木真美　小森智香子
島田侑子　内田大輔　牧　篤志　水野祐輔　森近　涼
8. 本書の執筆・編集は、矢田が行った。

裏表紙　文化財愛護のシンボルマーク

両手のひらと日本建築の伝統的要素である組物（くみもの）をイメージしたバターンを3つ重ねることにより、過去・現在・未来にわたる永遠の伝承を表現したものです。

目 次

はしがき

例言

目次

I 埋蔵文化財発掘調査の概要	1
II 位置と環境	2
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 中菜畑・一水口遺跡第4次発掘調査	5
1 調査にいたる経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
IV 萩原遺跡第12次発掘調査	8
1 調査にいたる経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	

図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 生駒市位置図	2
第2図 地形図	3
第3図 調査地周辺遺跡分布図	5
第4図 調査地位置図	6
第5図 トレンチ配置図	6
第6図 北壁・東壁土層断面図	7
第7図 出土遺物実測図	7
第8図 調査地周辺遺跡分布図	8
第9図 調査地位置図	9
第10図 調査区配置図	10
第11図 遺構平面図・土層断面図	10
第12図 出土遺物実測図(1)	12
第13図 出土遺物実測図(2)	12

表目次

第1表 2001年度（平成13年度）埋蔵文化財発掘届出・通知、 遺跡有無確認踏査願、発掘調査件数	1
第2表 2001年度（平成13年度）実施発掘調査	1

図版目次

図版1 中菜畑・一水口遺跡第4次発掘調査 1着手前状況 2トレンチ掘削 状況	
図版2 中菜畑・一水口遺跡第4次発掘調査 1土師器出土状況 2出土遺物	
図版3 萩原遺跡第12次発掘調査 1着手前状況 2遺構検出状況	
図版4 萩原遺跡第12次発掘調査 1遺構掘削後状況 2遺構掘削後状況	
図版5 萩原遺跡第12次発掘調査 1溝1(SD01) 完掘状況 2溝1(SD01) 完掘状況	
図版6 萩原遺跡第12次発掘調査 1溝1(SD01) 土層断面 2溝1(SD01) 弥生土器検出状況	
図版7 萩原遺跡第12次発掘調査 1ピット群 2出土遺物 弥生土器	
図版8 萩原遺跡第12次発掘調査 1出土遺物 弥生土器 2出土遺物 石器	

I 埋蔵文化財発掘調査の概要

生駒市では、昭和30年以降、土木工事等の開発行為が進み、地理的環境・歴史的環境が大きく変化している。土木工事等の開発行為の増加とともに、遺跡はその姿を消している。

このような状況のなかで、生駒市教育委員会では、1987年に市内の遺跡分布調査を実施し、「生駒市遺跡分布調査概報」を刊行した。1990年には、新たな調査成果をもとに、「生駒市遺跡地図」の改訂を行った。その後も、奈良県立樋原考古学研究所や生駒市教育委員会の調査等により遺跡範囲の拡大や新規発見があり、遺跡地図の改訂が必要な時期である。

2001年度（平成13年度）2月末現在で生駒市教育委員会が取り扱った埋蔵文化財発掘届出・通知、遺跡有無確認路查願、発掘調査件数は表1のとおりである。また、2001年度（平成13年度）2月末現在で実施した発掘調査は表2のとおりである。

本書には、国庫補助・県費補助事業として実施した中菜畑・一水口遺跡、萩原遺跡の調査概要を収録している。

埋蔵文化財発掘 届出 通知	合計	遺跡有無確認 路查願	試掘・確認 調査	発掘調査	立会調査	慎重工事	調査合計
14	4	18	0	1	7	6	14

第1表 埋蔵文化財発掘届出・通知、遺跡有無確認路查願、発掘調査件数

番号	古墳群番号 遺跡番号	遺跡名	調査地	現地調査期間	調査原因 (原因者)	調査面積	備考
1	33 4-A-1	俵口南窓跡 (第1次)	喜里が丘3丁目 615はか	010426 ↓ 010622	土砂採取 (大陽興産株式会社)	60m ²	奈良時代後期の須恵器 窯を確認
2	49 4-D-53	月見町窓跡 (第1次)	東生駒月見町 198・119・198-12	010529	分譲住宅 (新都市開発株式会社)	5m ²	遺構遺物ともなし
3	51 4-D-39	中菜畑・ 一水口遺跡 (第4次)	中菜畑2丁目 1151-24	010702 ↓ 010704	個人住宅(溝田庵)	6m ²	本書Ⅲ所収
4	66 4-D-36	萩原遺跡 (第12次)	萩原町369-1	010911 ↓ 010914	個人住宅(田中宏和)	38m ²	本書Ⅳ所収
5	78 4-A-	北新町窓跡 (第2次)	北新町 1076-2の一部、 1077-4	011012	個人住宅(藤井宣彦)	7.9m ²	遺構遺物ともなし
6	21 1-D-15	佐越窓跡 (第3次)	北田原町2016-2 番地先～1999-2 番地先	011113 ↓ 011122	道路建設(生駒市)	57m ²	中世から近世にかけて の土 窓・溝・柱 穴・ 池などを検出
7	64 4-D-5	奥山古窓跡 (第4次)	萩原町 36-1の一部	020218	分譲住宅 (石原会社 都住宅)	6m ²	すでに削平

第2表 2001年度（平成13年度）実施発掘調査

II 位置と環境

1 地理的環境 [第1・2図]

生駒市は、奈良県の北西の端に、その名がしめすとおり生駒山地の東側に位置している。東西7.8km、南北14.9kmと南北に細長く、西は大阪府、北東は京都府、東は奈良市と大和郡市、南は平群町、斑鳩町に接する。

地形的には、主峰生駒山(642m)を中心とした山地の東斜面と、矢田丘陵から西の京丘陵にはさまれた山間部である。西山中と称されることもある。そうしたなかで、河川によるわずかな谷底平野がみられ、平野部ごとに地域を細分することが可能である。

北部から北東部にかけては、富雄川水系の谷底平野と丘陵部が広がっている。

北西部から南部の地域は、生駒山地と矢田丘陵にはさまれた盆地状の地域である。天野川水系と竜田川水系にわかれており、南北二つの谷底平野が接するような関係にある。

北西部は、天野川水系の谷底平野である。川の東側の平野を生駒市、西側を四条畷市と川により大阪府との境界をなしている。

中央部から南部は、竜田川による平野を形成している。東西の幅が数100mと比較的に広い場所もあり、市内では比較的平坦な地域が広がっている。

2 歴史的環境

生駒にいつ頃から人が住み始めたかは定かではないが、『万葉集』や『日本書紀』などの文献にたびたび登場し、古くより大和と河内を結ぶ交通の要衝であったことがわかる。

人の存在が確認できるのは縄文時代からである。市南部の小平尾町付近で縄文土器が出土したといわれ、南出原町地内での発掘調査では石器が出土している。その実態はまだまだ不明である。

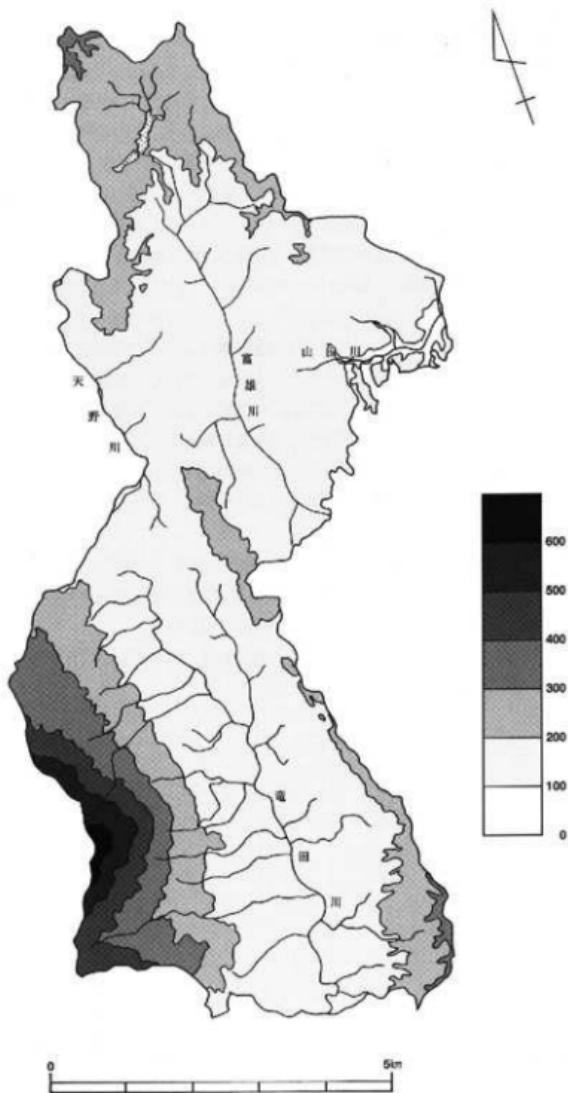
弥生時代についても、萩原遺跡や上町付近など市内各所で遺物が確認されていたものの詳細は不明であった。近年の樞原考古学研究所の発掘調査から、弥生時代の遺構があいついで発見されている。西畠遺跡では、中期の住居跡が、中畠・一水口遺跡では、後期の居住域を画する溝が確認され、少しづつではあるがその実態があきらかになりつつある。

古墳時代の遺跡として、竹林寺古墳が古くより知られている。古墳時代前期の前方後円墳で当初の全長は60m程度あったと考えられている。1939年に後円部の主体部の調査が実施されている。擾乱後であるが、特異な内部構造を持つことが明らかとなっている。

また、弥生時代と同様に竜田川の流域には古墳時代の遺跡が広がっている。一分コモリ遺跡では居館にめぐると推定される大溝が確認されている。西畠遺跡は弥生時代に引き続き集落が存在し、



第1図 生駒市位置図



第2図 地形図

土壤からは大量の土器が出土している。

奈良時代になると、生駒は須恵器生産の拠点として市内各所に窯が営まれる。その数は不明だが、市域の中部から北部にかけての地域で相当の数あったことであろう。金比羅窟跡からは「宮」と記された杯蓋が出土している。上町の庄ノ谷遺跡ではそうした須恵器生産にかかわる工人の集落跡が想定されている。西畑遺跡では大型建物跡が検出されており、この地域を治める拠点と想定されている。『日本靈異記』には大仏建立に尽力した行基が「生馬の山寺」に居住したとされている。この寺は有里の竹林寺をさすと考えられ、境内には行基墓がある。また萩原では明治5年に開墾中に銅板墓誌が発見され、奈良時代の貴族の美努岡萬のものであることが明らかとなっている。生駒は半城京からも比較的近いことから、人々の活動も平城京と密接に関係していたのであろう。

中世になると、遺跡数も増え、文献からもその様子をうかがうことができる。市内には、鷹山庄・上鳥見庄・生馬庄・田原庄などの荘園が存在したが、他の大和と同様に興福寺の支配がおよんでいた。『大乘院寺社雜事記』などには、一乘院の衆徒の鷹山氏や「生馬両職人」と称された荘官達がたびたび姿を見せ、活動の一端をうかがうことができる。こうした在地勢力は、高山城や北田原城など市内各所に中世山城を築いている。市内各所の発掘調査による出土遺物も13世紀後半から14世紀にかけてのものが多くなる。このことは彼らの活動と関連するのであろう。

有里と萩原の境界部には中世墓地として有名な奥山往生院があり、正元元（1259）年の銘を持つ宝篋印塔が立っている。往生院は行基信仰が盛んになるにつれて大きく発展したものと考えられ、今なお近隣の憩墓となっている。

近世に入り江戸時代の生駒は、添下郡と平群郡の22の村に分けられ、旗本領と郡山藩領より構成される。幕末の慶応4（1868）年には、旗本領の領民が辻村にある代官の矢野陣屋を襲撃するという事件が起こる。その際に作成された連判状が今に伝わっている。

近代になると町村制の施行により、北倭村、北生駒村、南生駒村が成立する。その後、合併などをくり返し、昭和46年に現在の生駒市にいたる。

III 中菜畑・一水口遺跡第4次調査

1 調査にいたる経過

生駒市中菜畑2丁目1151-24で個人住宅建築工事による埋蔵文化財発掘の届出を受けた。工事予定地は、中菜畑・一水口遺跡の北西部にあたり、生駒市教育委員会で発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、2001年7月2日・4日に実施した。調査面積は約6m²であった。

2 位置と環境 [第3・4図]

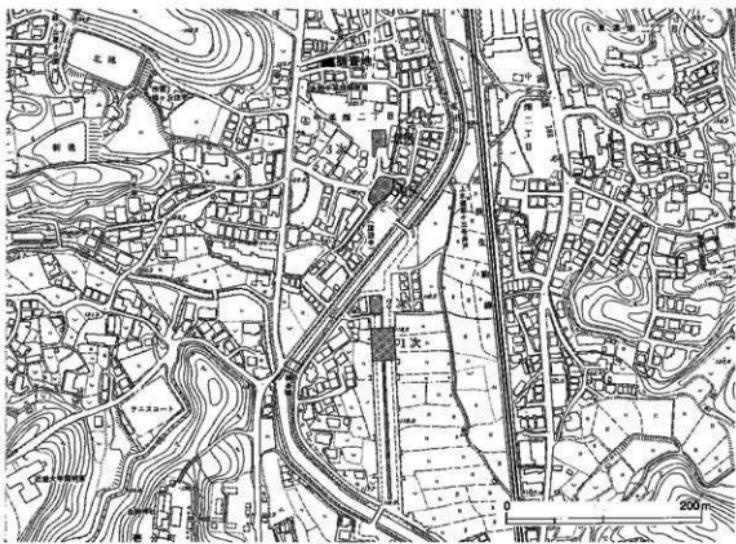
調査地は生駒谷と呼ばれる竜田川がつくりだした谷底平野の中央部にあたり、竜田川の右岸に位置している。西からは丘陵の尾根がのびており、平野部と丘陵部の境界部に位置している。

国道168号線のバイパス工事による櫛原考古学研究所が行った発掘調査により、竜田川に沿って弥生時代から中世にいたる複合遺跡、壺分遺跡群が存在することが明らかとなっている。一分コモリ遺跡では古墳時代の居館、西畠遺跡では奈良時代の大型建物などが存在する市内でも有数の遺跡地帯である。今回の調査地付近では、1998年の試掘調査により遺跡の存在が確認された。1999年の本調査（第3次）では、弥生時代後期の溝、中世の掘立柱建物などが検出している。これにより竜田川の北側にも遺跡範囲が広がり、中菜畑・一水口遺跡として指定されている。

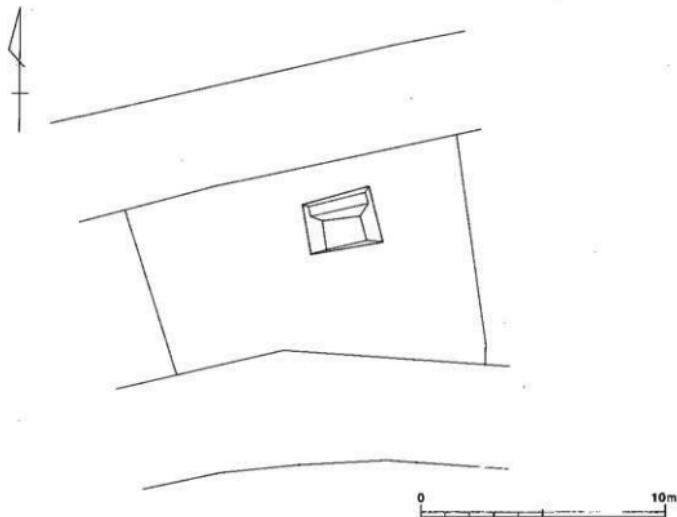
3 遺跡の調査



第3図 調査地周辺遺跡分布図



第4図 調査地位置図

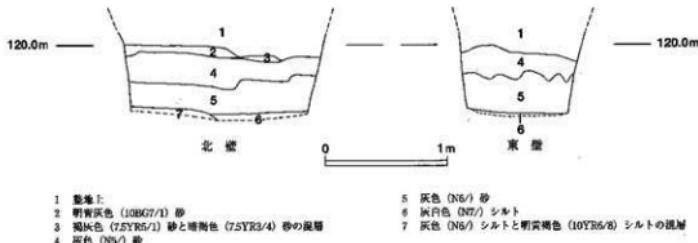


第5図 トレンチ配置図

(1) 調査区と層序 [第5・6図、図版1・2]

調査地は、中菜畑・一水口遺跡の北西の端に位置しており、遺跡の範囲確認に目的を置いて調査を行った。調査地内に任意に2m×3mのトレンチを設定した。

層序は、整地土(1層)、青灰色砂(2層)、褐灰色砂と暗褐色砂の混層(3層)、灰色砂(4層)、灰色砂(5層)、灰白色シルト(6層)、灰色シルトと明黄褐色シルトの混層(7層)である。6層・7層とも地盤は安定しておらず層中から遺物も検出することから自然流路等の堆積層の一部と考えられる。造構面までの掘削は、現地表から2mを越えるため断念した。



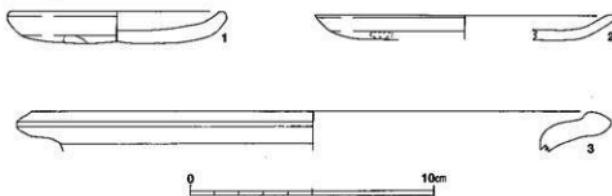
第6図 北壁・東壁土層断面図

(2) 遺物 [第7図、図版2]

いずれの土器も13世紀後半から14世紀のものである。

土師皿(1)。口径9.0cm、器高1.2cm。平底に体部がなだらかに内湾気味に口縁部までつづき端部をまるくおさめる。

瓦器皿(2)。口径12.4cm、器高1.0cm。体部外面上半はヨコナデ、下半は指頭圧痕により調整を施す。
土師器羽釜(3)の口縁部。口径24.4cm。口縁端部の折り返しが見られる。



第7図 出土遺物実測図

4 まとめ

今回の調査では、整地土が予想以上に厚かったため、中世の遺物包含層を確認するにとどまった。遺物包含層は自然流路等による堆積層と考えられる。

今回の調査では確認できなかったが、さらに下層には弥生時代の遺物包含層もしくは造構が存在する可能性が高い。

調査の目的であった中菜畑・一水口遺跡の範囲は、調査地までまでおよぶことは確実となった。遺跡は北西方向に広がる可能性があり、今後も発掘調査が必要となる地域である。

IV 萩原遺跡第12次調査

1 調査にいたる経過

平成13年9月3日付けで萩原町369-1で、個人住宅建築工事にともなう埋蔵文化財発掘の届出を受けた。工事予定地は萩原遺跡の中心部にあたり、生駒市教育委員会で発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、2001年9月11日～14日まで実施した。調査面積は、38m²であった。

2 位置と環境 [第8・9図]

調査地は生駒谷と呼ばれる竜田川がつくりだした谷底平野の南部にあたる。竜田川と神田川が形成した河岸段丘上にあたり、神田川にそって東へ向けてなだらかにくだる緩斜面に位置している。生駒山地を越えて大坂・奈良を結ぶ暗奈良街道の街道筋北側に位置している。

萩原遺跡は弥生時代の遺物が採取されたとされ、古くより知られている。1986年の生駒市立南小学校の校舎建設にともなう発掘調査では、弥生時代の遺構は確認されていない。中・近世の掘立柱建物・土塹・素掘溝などが確認されたなどとどまっている。

その後の調査でも土師器・須恵器・瓦器などとともに弥生土器は出土しているが、弥生時代の遺構は確認されていない。今回の調査では弥生時代の遺構が検出されることが期待された。



第8図 測量地周辺遺跡分布図



第9図 調査位置図

3 遺跡の調査

(1) 調査区と層序 [第10・11図、図版3]

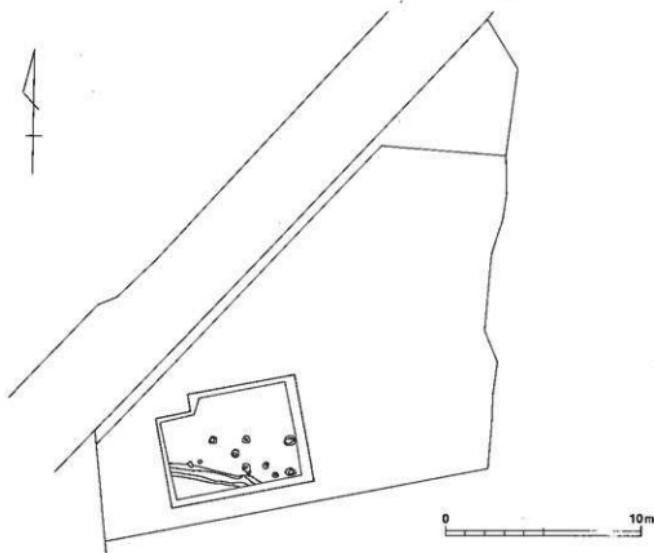
家庭菜園として利用されている場所に新たに住宅が建築される。基礎により文化財に影響がおよぶ部分を調査区として設定した。

基本層序は、整地土(1層)、暗緑灰色粘性砂質土(2層、耕土)、黄灰色粘性砂質土(3層・4層、耕土)、橙色粘性砂質土・橙色粘性砂質土と黄灰色粘性砂質土の混層(5層・6層、床土)、黄色粘性土と明黄褐色粘性土の混層(11層、地山)である。調査区の南西部では黄灰色粘性砂質土と黄橙色粘性砂質土の混層(10層)で、調査区北東部から南部にかけてでは黄灰色粘性砂質土と明黄褐色粘性砂質土の混層(12層)で遺構面となる。調査区の東部では褐色から灰褐色の遺物包含層をはさむ。現地表から約30cmで遺構面にいたり、遺構面は西から東にむけてなだらかに下っている。

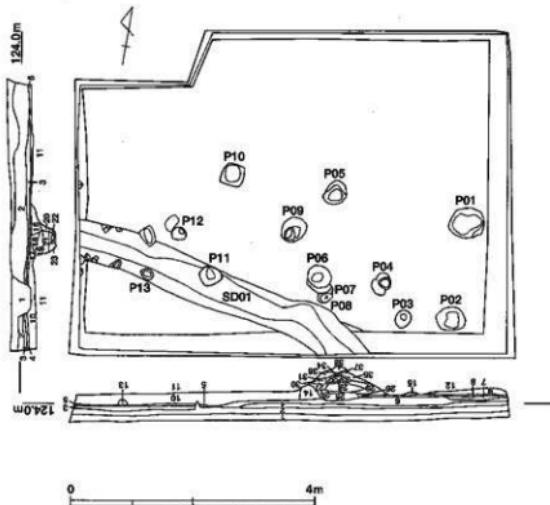
(2) 遺構 [第11図、図版3～7]

溝1 (SD01) 弥生時代 [第11図、図版5・6]

調査区の南部、西から南東にかけてで溝1 (SD01) を検出した。この溝は、西やや北方向から、南東方向やや南にその針路をとる、調査区外へとのびていくと予想される。遺構の上部は後後にかなり削平されていると思われる。検出した溝は、幅55～70cm、深さ45～50cm、底部は丸い。地山を掘り込むかたちで掘られ、遺構の西部では地山の石が露出する。遺構の南部では、溝の北側の壁面がややえぐれている。西からの水流によるものであろう。堆積状況は、粘性砂質土から砂礫の互層である。それぞれの最下層には直径3cm程度の礫が多く堆積している。溝は流水による自然堆積、埋



第10図 調査区配置図



第11図 遺構平面図・土層断面図

1. 黄褐色 (75GY3/1) 粘性砂質土。
2. 黄褐色 (25Y5/1) 粘性砂質土。
3. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
4. 黄褐色 (75YR6/8) 粘性砂質土。
5. 黄褐色 (75YR6/8) 粘性砂質土の混層。
6. 黄褐色 (75YR6/8) 粘性砂質土。
7. 黄褐色 (10YR6/1) 粘性砂質土。
8. 黄褐色 (75YR4/2) 粘性砂質土。
9. 黄褐色 (75YR4/1) 粘性砂質土と明黄褐色 (75YR5/8) 砂質土の混層。
10. 黄褐色 (25Y5/1) 粘性砂質土と黄褐色 (75YR7/8) 砂質土の混層。
11. 黄褐色 (25Y8/6) 粘性砂質土と明黄褐色 (25Y7/6) 粘性砂質土の混層。
12. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土と明黄褐色 (25Y7/6) 粘性砂質土の混層。
13. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
14. 黑色 (75YR2/1) 粘性砂質土。
15. 黑色 (75YR2/1) 粘性砂質土。
16. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
17. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
18. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
19. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
20. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
21. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
22. 黄褐色 (25YR7/0) 粘性砂質土。
23. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
24. 黑色 (75YR2/1) 粘性砂質土。
25. 黑色 (75YR2/1) 粘性砂質土。
26. 黑色 (75YR2/1) 粘性砂質土。
27. 黄褐色 (10YR5/1) 粘性砂質土。
28. 黄褐色 (10YR6/1) 粘性砂質土。
29. 黄褐色 (25Y7/6) 粘性砂質土。
30. 明黄褐色 (25Y7/6) 粘性砂質土。
31. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土と明黄褐色 (25Y7/6) 粘性砂質土の混層。
32. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
33. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
34. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
35. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
36. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。
37. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土と明黄褐色 (25Y7/6) 粘性砂質土の混層。
38. 黄褐色 (25Y6/1) 粘性砂質土。

没したものである。埋土からは、弥生土器・石器などが摩滅した状態で出土した。土器の年代からこの溝は弥生時代中期のものである。堆積状況や規模からみて水路として機能したものと考えられる。この付近には、東に向けてなだらかに下る斜面を利用して水田が營まれていた可能性がある。

ピット (P01~ P13) 【第11図、図版4・7】

調査区内の中央部から南部にかけて13のピットを確認した。南壁面でも3点確認できた。ピット11 (P11) とピット13 (P13) は、溝1 (SD01) 上にある。いずれのピットも柱根は残っていなかった。ピット1 (P01)・ピット2 (P02)・ピット3 (P03)・ピット6 (P06) からは弥生土器とみられる摩滅した小片が出土した。ピット5 (P05) からは弥生土器の小片と人頭大よりやや小さい石が出土した。ピットは、今回の調査区内では不規則な配置をしており、明確な建物状況は不明である。堆積状況からみるとピット1 (P01) とピット2 (P02) はセットになるものと考えられる。ピット6 (P06)、ピット7 (P07)、ピット8 (P08) で切り合いがみられ、ピット7 (P07) が最も新しいものである。

(3) 遺物

溝1 (SD01) 出土遺物 【第12・13図、図版7・8】

弥生土器コンテナ1箱・石包丁・石鏃・サヌカイト片が出土した。土器は、摩滅した小片ばかりで接合できるものはなかった。器種としては壺もしくは甕が多く、その年代は弥生中期後半に属するものである。出土した土器の約4割が生駒山西麓産のものとみられる。

弥生土器 【第12図、図版7・8】

壺もしくは甕の底部 (1~6)。1は底径6.2cm、外面にヨコナデが施されている。2は底径8.0cm、外面に指頭圧痕を残す。3は底径4.0cm、内面に指頭圧痕がみられる。4は底径4.8cm、内面に指頭圧痕がわずかに残る。生駒山西麓産。5は底径5.0cm、体部外面にヘラミガキ調整がわずかに残る。6は底径4.8cm、体部外面にヘラミガキ調整、内面底部に指頭圧痕が見られる。

鉢の口縁部 (7)。内湾ぎみの口縁部に3条の凹線文をもつ。内面にハケメがわずかに残る。生駒山西麓産。

壺の口縁部 (8~10)。8は細首壺。外面口縁部に簾状文手法の斜列点文と円形浮文、内面には指頭圧痕がみられる。9・10は広口壺。9は口縁端部を真下に垂下させ、先端が尖っている。口縁端面は簾状文が施されていた可能性が高い。生駒山西麓産。10は広口壺の口縁部。口縁端面に凹線文、口縁端部内面に3列の竹管文を施す。生駒山西麓産。

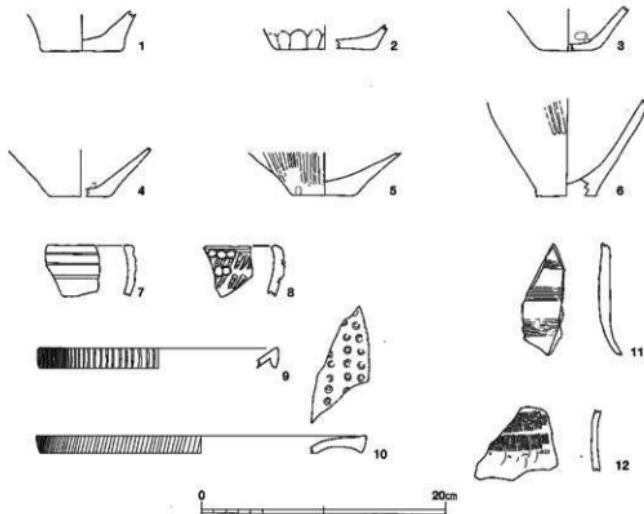
壺の頸部 (11・12)。11は上9条、中9条、下11条の櫛描直線文がみられる。生駒山西麓産。12は外面に櫛描簾状文・刺突文・扇形文、内面には指頭圧痕がそれぞれわずかに残る。生駒山西麓産。

石器 【第13図、図版8】

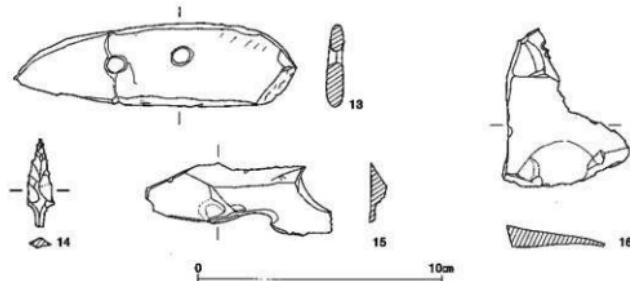
磨製石包丁 (13)。直線刃半月形態で2箇所に縫穴がある。緑色片岩。先端の欠損と風化により詳細は不明。

石鏃 (14)。凸基有茎式で先端が欠けてはいるが、ほぼ完全な形で出土した。

サヌカイト片 (15・16)。小片も含めて7点出土したが大きなもの2点掲載した。



第12図 出土遺物実測図(1)



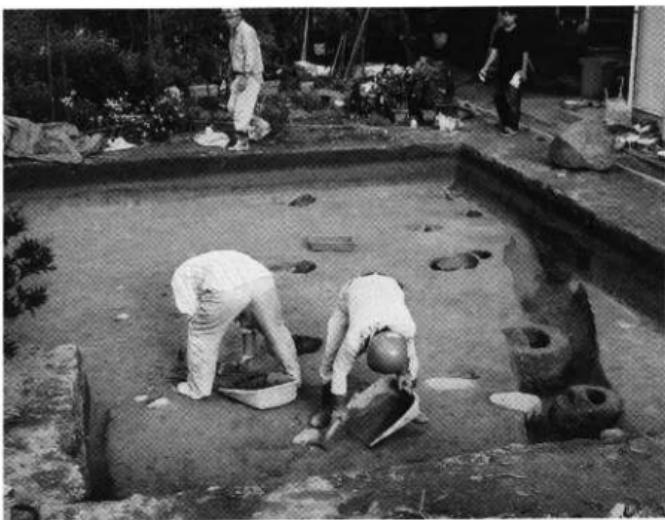
第13図 出土遺物実測図(2)

4まとめ

萩原遺跡では今回の調査で初めて弥生時代の遺構を確認することができた。これにより老分遺跡群の中菜畑・一水口遺跡、西畑遺跡をすべて萩原遺跡へと、竜田川の川筋に弥生時代から人々の生活域がひろがっていたことが明らかとなった。また、出土した弥生土器は生駒山西麓産の物がかなりの割合で含まれている。これは生駒山脈をはさんで大和と河内とで人々の交流が活発に行われていたことを裏付けている。当時の人と物の流れを解明する貴重な資料となることであろう。

小面積の調査であったが、継続的に続けていくことにより、遺跡の様相が少しづつではあるが明らかになることであろう。今後も地道な調査を積み重ねていきたい。

図 版





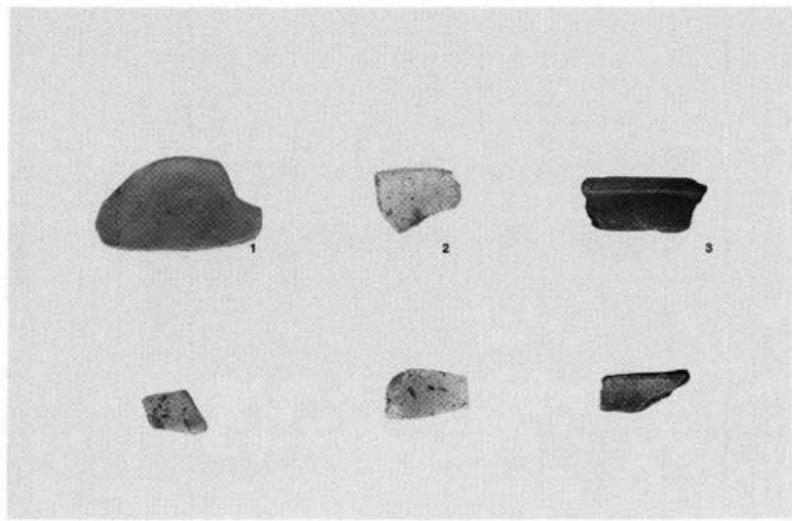
1 着手前状況



2 トレンチ掘削状況（北から）



1 土師器出土狀況



2 出土遺物



1 着手前状況



2 遺構検出状況



1 遺構掘削後状況



2 遺構掘削前状況



1 溝1 (SD01) 完掘状況 (西から)



2 溝1 (SD01) 完掘状況 (南から)



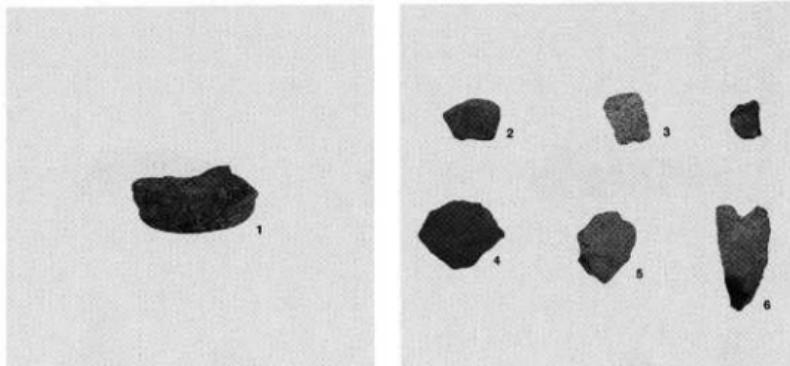
1 溝1 (SD01) 土層断面 (南壁面)



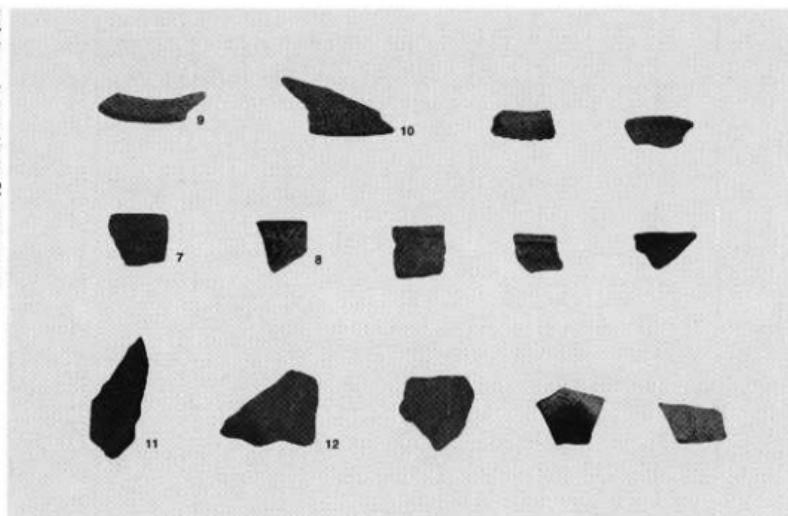
2 溝1 (SD01) 弥生土器検出状況



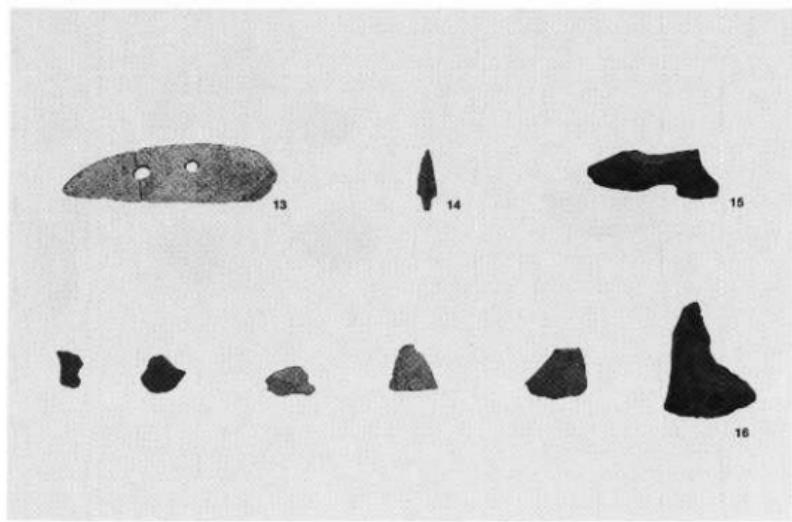
1 ピット群（北から）



2 出土遺物 弥生土器



1 出土遺物 弥生土器



2 出土遺物 石器



調査補助員達と

報告書抄録

ふりがな	いこましないいせきはつくつちょうさがいようほうこくしょ						
書名	生駒市内遺跡発掘調査概要報告書 2001年度						
副書名							
卷次							
シリーズ名	生駒市文化財調査報告書						
シリーズ番号	13						
編著者名	矢田直樹						
編集機関	生駒市教育委員会						
所在地	〒630-0288 奈良県生駒市東新町8番38号				TEL 0743-74-1111		
発行年月日	西暦 2002年 3月29日						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村 遺跡番号					
中菴畠・ 一水口 遺跡	奈良県生駒市 中菴畠 2 丁目 1151-24	29209	34° 40° 45°	135° 42° 30°	20010702 20010704	6	個人住宅 建築工事
萩原遺跡	奈良県生駒市 萩原町 369-1	29209	34° 39° 44°	135° 42° 27°	20010911 20010914	38	個人住宅 建築工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
中菴畠・ 一水口 遺跡	集落跡	弥生 中世		土師器 瓦器			
萩原遺跡	集落跡	弥生 中世	溝 ピット	弥生土器 石包丁 石鎌 サヌカイト片			

生駒市文化財調査報告書 第13集
生駒市内遺跡発掘調査概要報告書
2001年度

2002年3月29日

編集・発行 生駒市教育委員会
奈良県生駒市東新町8-38号

印刷 明新印刷株式会社
奈良市南京終町 3-464

